

# 貼り薬について



「貼り薬」と聞いて思い浮かべるものはなんでしょうか。恐らく多くの方が「湿布」と呼ばれる局所性の貼付剤を思い浮かべるでしょう。実は皮膚に適用する医薬品は、局所作用を目的とするものと全身作用を目的とするものに分類されます。湿布などの消炎鎮痛剤は局所作用を目的とした貼付剤です。全身作用を目的とした貼付剤として、米国では1981年に乗り物酔い治療薬が発売されてから、約40年の間に20品目を超える貼付剤が発売されています。

日本では、狭心症治療薬が1984年に発売され、現在までに約16成分の全身作用を目的とした貼付剤が使用されています。

## 貼付剤の特徴

広がりを見せている貼り薬について、特に全身性の貼付剤の特徴をご紹介します。まずは飲み薬（経口剤）との吸収の違いについてです。



経口剤を服用した後は、その成分が主に小腸から吸収されます。吸収された薬剤成分は門脈を経て肝臓に入ります。

肝臓を通過した薬剤成分は下大静脈を介して全身循環へ回り、標的臓器へ到達します。例えば、抗不整脈薬のベプリジルは肝臓での初回通過効果を受け、生物学的利用率は約60%とされます。

続いて貼付剤の吸収のされ方について説明します。貼付剤を皮膚に貼付すると、薬剤成分が皮膚の角質層へ分配され、角質層以下の表皮組織に拡散します。続いて、薬剤成分が角質層から表皮中に分配・拡散します。そして、真皮中の血管へ移行し全身の血液中に薬剤成分が入ります。

このように貼付剤の薬剤成分は肝臓を通らないため、肝初回通過効果を受けずに直接全身循環へ入ります。

このような貼付剤、経口剤の吸収のされ方により、血中濃度の推移にも違いがあります。貼付剤は製剤中に含まれる薬剤成分が持続的に放出されるため、安定した血中濃度が得られます。

最後に、日本では最も新しい全身性の貼付剤として、軽度のがんの痛みをとる貼付剤が昨年発売になりました。がんの患者様にとって、飲まずに痛みを軽減できる貼付剤は負担の軽減に繋がると考えています。また患者様の家族や介護者にとっても簡便に投与できるというメリットがあります。貼付剤が治療の選択肢に入ることができれば幸いです。

## 貼付剤のメリット、デメリット

### メリット

以上のことから貼付剤は、

- ① 消化管における吸収の影響や肝代謝による肝初回通過効果を受けないため、薬物のバイオアベイラビリティ（生物学的利用率）を高められる可能性がある。
- ② 製剤中に含まれる薬剤成分が持続的に放出されるため、安定した血中濃度が得られる。
- ③ 緩やかに血中濃度が立ち上がるため、副作用の発現を少なく抑えられる可能性がある。
- ④ 貼付剤は副作用などで投与中止したい場合、剥離することで投与中止できる。

といったメリットが期待できます。

### デメリット

デメリットとしては、皮膚に対する刺激性を有することがある、貼付部位により吸収が異なる、剥がし忘れることがあるといった点が挙げられます。

こういったメリット、デメリットを考慮したうえで薬の剤型選択をしてみたいかどうか。



診療予約は  
こちらから

電話予約：0799-62-5566（診療時間内）

ネット予約：<https://ssc6.doctorqube.com/soyama-clinic/>（24時間）

\*携帯電話からは右のQRコードからでも予約できます\*

